

キャリア転機を経験した中高年における働く意欲とスピリチュアリティに対する志向性について

上原 淳一[†]

Work motivation and the aspiration for spirituality for the middle-aged and older, who had experienced career transitions

Junichi Uehara

1. 背景と目的

わが国では、ここ数年、定年後の継続雇用や定年前後の転職を促進する動きが社会全体に広がってきた。しかしながら、いくら社会的条件が整備されても、それだけで中高年の働く意欲が高まるとは言えまい。とくに、これまで、キャリア転機を経験してストレスを感じた可能性のある中高年の「働く意欲 (work motivation 以下, WM)」を高める要因については、臨床心理学的研究が要請されていると思われるが、そうした研究を見出すことはできなかった。

経営学や組織行動論の分野では、WMに関連して、認知・感情・欲求の3要因が重要だとされてきた (たとえば、鹿毛, 2013)。しかし、筆者の周囲では、これら3要因に加えて、スピリチュアリティへの志向性がWMの向上に寄与しているように思われるケースが、複数認められた。

キャリア開発についての研究で知られているHansen, S. S. (1997/2013) は、人生における6つの重要課題の一つとして「スピリチュアリティと人生の目的を探究する」ことをあげている。彼女の言う「スピリチュアリティ」とは、個々人があるカイロスにおいて超越的なものとのつながりを実感したときに発現してくるもので、特定の宗教や宗派においてのみ醸成されるものではない。もしかすると、ストレスフルな転機を経験した中高年であっても、スピリチュアリティに開かれることによって、働く意欲が高まるケースはかなり多いのかもしれない。

そこで本研究では、定年等で転職を経験した中高年者において、現在の仕事に対するWMに影響している可能性のある要因として、精神的不調、スピリチュアリティへの志向性、現在感じている働く目的をとりあげ、それらがWMにどの程度影響しているか、さらに、キャリアの転機でスピリチュアリティに開かれることがどのようなプロセスを経てWMに影響しうるかを、ごく少数の対象者においてではあるが、詳細に調べてみることにした (本報告のもとに

なった修士論文執筆のために行った研究は、放送大学研究倫理委員会の承認を得て実施した (平成30年6月28日, 通知番号 2018-12))。

2. 方法

2.1 研究協力者

筆者の知人やその人の知己から、過去10年以内に定年前後の転職等を経験した者8名 (調査時の年齢が50歳~64歳の男性6名, 女性2名) に研究協力を依頼した。

2.2 データ収集方法

アンケート調査 (45分程度) およびインタビュー調査 (アンケート調査終了後, 約1時間程度の半構造化面接) により収集した。

2.3 調査内容

(1) アンケート調査

キャリア転機を経験した中高年が現在感じている働く意欲の強さ (WM) を4段階で回答してもらい、それと関連する可能性のある精神的健康状態の悪さ (H) を「日本版GHQ12 (中川・大坊, 2013)」を用いて、また、スピリチュアリティに対する志向性 (S) を「スピリチュアリティ傾向尺度 (中村, 2007)」などを参考にして作成した質問紙を用いて、また、現在感じている働く目的 (P) を人生全体の「意味内容の分類 (浦田, 2013)」を参考にして作成した質問紙を用いて調べ (Hは4件法, SおよびPは5件法による) それぞれの間の相関を求めた。

(2) インタビュー調査

本研究では、アンケートへの回答を踏まえ、さらに、「働く意欲」の変化をライフラインチャート (人生曲線) で描いてもらい、それに沿って、回想したことやその時々感じたことなどを自由に語ってもらった。

[†] 2018年度修了 (臨床心理学プログラム)

3. 結果と考察

3.1 アンケート調査（量的分析）

H, S, Pそれぞれは、全体としてWMとの間に有意な相関は認められなかった。そこで、H, S, Pそれぞれの質問項目をクラスター分析し、それぞれのなかで4つのクラスターを形成し、各クラスターとWMとの関係と、クラスター相互の関係を図1にまとめた（相関係数の絶対値が0.5以上のもののみ表示）。

この結果からみると、「P-1 生活の糧を得るため」に働いている人のWMは低く、また、「H-4 自信を失い、自分は役立たない人間だと感じている」人のWMはかなり低い。一方、スピリチュアリティに対する志向性（S）の高さとWMと直接の関係は認められなかった。

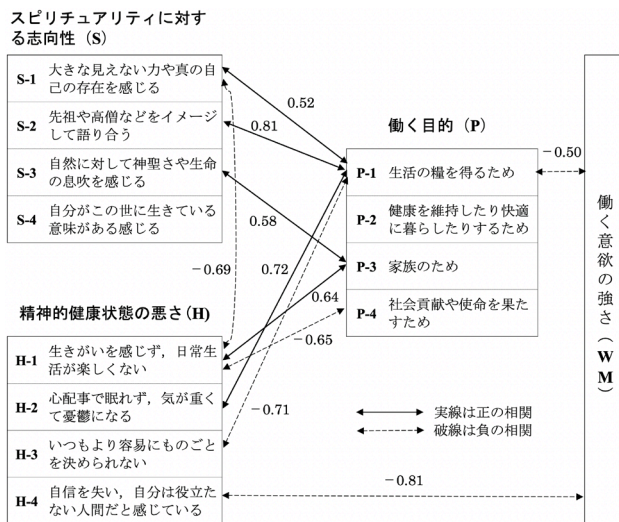


図1 働く意欲の強さ (WM) と精神的健康状態の悪さ (H), スピリチュアリティに対する志向性 (S), 働く目的 (P) の各クラスター間の相関

3.2 インタビュー調査（質的分析）

本報告のもとになった修士論文のインタビュー調査では、働く意欲に関してさまざまな角度から語っていただいたが、ここでは、スピリチュアリティに関わる回想や気づき、それらの受けとめなどについての語りを中心にまとめる。なお、質的分析については佐藤（2008）を参考にし、まず、話された言葉をセグメントにし、それらをまとめたものを概念カテゴリーとし、さらに、概念カテゴリー間の関係をストーリーとして描き出して概念モデルを構築した。以下、〈〉は概念カテゴリー、【】は概念モデルを示す。

ここで見出された概念モデルは「働く目的と働く意欲の関係」において3つ、「スピリチュアリティと働く目的の関係」において2つである。

(1) 働く目的と働く意欲の関係

概念モデル1-1:【これまでのキャリア全体を振り返った時、逆境も含めてこれまでの経験には意味があり、それ

が今に生きていると思うようになった】

〈逆境や試練と思っていたことが実は良い経験になっていて、それがあってこそ今があると思うようになった〉、および〈これまでの経験によって身につけた仕事の進め方の基本や経験知が、今の仕事に生きていると思うようになった〉という2つの概念カテゴリーから導き出された。これらの概念カテゴリーの元となった語りの例は、次のとおり。

この職歴を...私が自分の仕事を通して感じるの、何か与えられた試練も次に生きように見えて、...だから、どんな仕事にも楽しみが見出せるんですよ (Aさん)。

(災害後の一時期など)あまり恵まれない時期があったけれど、それはそれで、そういうことも経験してこそ今があると思いますね (Bさん)。

(定年後に転職するとき)「Gさん、唯一あなたの実績は〇〇国に1年駐在していたことです。...それがなかったら採用できませんでした」と言われた。...今から思うと「何だろうな」と思うこと (本当の自分は何かと悩むような辛い経験)が、今役に立っている (Gさん)。

(今回インタビューを受けて振り返ってみて)こういう経験をしたことが考え方の転機になったのではないかな、とか、...今の自分の仕事に対する考え方や意欲に、こういう経験が活かされていたりするのだな、ということが分かりました (Dさん)。

(以前、転職して新しい仕事に就いた時)もちろん分野は全然違うのですが、これまでやってきたことと...結局、仕事の基本って同じなので、あまり違和感はなかったです。...多分仕事の基本は一緒なのだろうという思いがあったからこそ、変わったのだらうと思います。... (転職前にもマーケティングの仕事をしていたので)今の仕事は、そういう意味で似ています...繋がっています (Hさん)。

概念モデル1-2:【これまでの経験の意味に気づくとともに、自分の使命や役割を果たしたり、社会や人の役に立ったりするために働いたことを思い出し、これからもそのように働きたいと思うことがあった】

〈逆境の時のことを振り返る中で、自分の使命や役割に気づき、それを果たすために働いていたことを思い出した〉、〈今の仕事は実は社会や人の役に立っていることに気づき、自分が今なすべきことが見えるようになった〉、そして〈定年退職後も働いて、何らか世の中にお返ししたいと思うようになった〉という3つの概念カテゴリーから導き出された。これらの概念カテゴリーの元となった語りの例は、次のとおり。

(倒産の危機にあった子会社に出向した時のことを振り返ると)ここらへん (使命を果たそうという気持ち)が違ったのだろうな。...従業員の生活を守らなければならないし、倒産してしまったら取引先も大変だから。...防災拠点を作る話では...自治体の役にも立つことができた (Eさん)。

(定年後に転職した)今の仕事をやってみて初めて分かったことなのだけれども、...仕事として海外に貢献していることをやっている。...後から気づいたことかも知れない

ですけど...貢献しているなという実感はあります (Fさん)。

今やっている (発展途上国のインフラ整備に関わる) 仕事は、...発展途上国の何かになるだろう、という気持ちはあります (Gさん)。

私は2年前に定年退職をし、...翌日から嘱託という形の雇用契約をこの会社としてきて、...もちろん収入のこともありますが、何らか世の中にお返ししたいというのか、次世代の役に立つことがしたいという気持ちはとても強いなと思っています (Hさん)。

概念モデル1-3：【社会や人の役に立っていると実感したり、使命感を抱いたりしたときに、モチベーションが高まり、やる気が湧いてくることがあった】

〈自分が働くことが社会や人の役に立っていると実感することによって、モチベーションが高まることがあった〉、および〈会社が危機などの時に使命感を抱き、やる気が湧いてくることがあった〉という2つの概念カテゴリーから導き出された。これらの概念カテゴリーの元となった語りの例は、次のとおり。

(被災者のための仕事をしていた時には) 精神的には辛かったけれども、仕事のモチベーションは落ちなかった。...毎日がエクサイティングでしたね。...自分が役に立っているなという実感がすごくありましたから (Aさん)。

今の仕事が海外に貢献しているという実感があるので、これが仕事のモチベーションにつながっている (Fさん)。

...僕も去年この (定年後に今の発展途上国のインフラ整備に貢献する会社に転職するという) 話がなかったら...むしろ (働く意欲は) もっと下がっていただろうね (Gさん)。

(福祉関係の子会社に出向した時は赤字になって) 会社としては大変だったんですけど、(社会に貢献していると強く感じられて) いいところへ来たと思いました。...社員の方々が非常に高い志を持って仕事をしているというのは、ある意味本当に頭が下がる思いでした (Dさん)。

(災害後の混乱状態の中で) 被災者の方からも怒りの電話が架かってくるので、とにかくこの声をまとめて、会長とか社長に伝えなければ、という思いがすごく沸々と湧いてきた (Hさん)。

以上をまとめると、「仕事をするのが社会貢献や自分の使命・役割を果たすことにつながっているという認識が、働く意欲の向上をもたらした」と感じている人がある程度いるように思われる。

(2) スピリチュアリティと働く目的の関係

概念モデル2-1：【転機を経験した時などに、神や大きな見えない力、本当の自分や天職、運などの超越的な存在を感じるがあった】

〈転機を経験した時に、神や大きな見えない力の働きを感じるがあった〉、〈転機を経験した時に、これまで気づけなかった本当の自分や天職というものが存在すると思うようになった〉、および〈運が良いと思うことが度々あり、運や巡り合わせというものが世の中にあると感じることがあった〉という3つの概念カテゴリーから導き出され

た。これらの概念カテゴリーの元となった語りの例は、次のとおり。

人間関係がうまくいかなくなって...その状況が辛くて「もう自分がいない方がいいかな」と思ったのですけれども、その後ふっと何か抜けた時期があり、...今はこんなに悩んでいるけれども、...見方を変えると...きっとこの経験は、神様がいて、何か必要だから私に考えさせるために与えているのかな、と思うようになりました (Aさん)。

(海外事務所に駐在していたときに、会社が構造不況になり、夏のボーナスがカットになって) 本当に涙が出て...。「自分は、本当は何をしたかったのだろうか」、「もっと別の人生が絶対にあるはずだ」みたいなことを思っていた。...ある時から、自分の天職は、地方の中学とか...よくいって高校の英語の先生なのだろうな、本分で行ったらそうになっていたのだろうな、というのがあるのです (Gさん)。

(危うく事故に遭うところを、間一髪で回避できたという経験が度々あり) 僕は、見えない力というのがいいのかどうか分からないが、やっぱり運命というのは世の中にあるのだろうな、...巡り合わせみたいなものがあるかな、と思っています (Fさん)。

概念モデル2-2：【超越的な存在を感じるによって、これまでの経験が意味づけられ、それを肯定的に受け入れられるようになったと思うことがあった】

〈何か大きな見えない力によって、人生の収支のバランスが取れていると思うようになった〉、〈自分がしてきたことは、天職と思うことに、どこかでつながっていることに気づいた〉、および〈運や偶然の力によって、仕事の機会に恵まれてきたと感じる〉という3つの概念カテゴリーから導き出された。これらの概念カテゴリーの元となった語りの例は、次のとおり。

私、人生って収支はプラスマイナスゼロだと思っているんですよ。良いこともあれば悪いこともあるって。それは神様みたいな人がどこかでちゃんとコントロールしていて、だから、一方的に良いことばかりも続かないし、一方的に悪いことばかりも続かないと。そういうのが精神の拠り所になるというのですかね (Aさん)。

今、英語の契約をやったり、英語を使ったビジネスをしたりしているという意味では、(天職と思うことに) 近いことをしている。どこかに (自分の天職は英語の教師ということが) 引っかかっていたのですよ (Gさん)。

本当に恵まれているなと思って。ずっと面白い仕事をやらせてもらえて (Aさん)。

振り返って、...あまり嫌だなと思うことはなかったから、恵まれたかなと思いますね (Bさん)。

これらをまとめると、「超越的な存在を感じたことが、これまでの経験の意味への気づきとその肯定的な受容を促し、さらに、社会貢献や使命達成への動機づけにつながり、働く意欲が高まった」と感じている人が少なからずいるように思われる。

4. 全体的考察

最後に、スピリチュアリティへの志向性が働く意欲に影響したプロセスを示唆する語りの例を、ひとつ紹介したい。

Aさん(50歳代前半)は、人間関係に深く悩み、「もう自分はいない方がいい」とさえ思ったこともあったが、そんなとき、ふと、「神様のような人」がいると感じた瞬間があったという。その「存在」は、「人生の収支がプラスマイナスゼロになるようにコントロールしている」ように感じられた。この体験後、Aさんはこの存在が「自分に(なすべきことを)考えさせるために」試練を与えるのだと感じるようになり、「与えられた試練も次のところで生きるように見えて、どんな仕事にも楽しみが見いだせる」ようになったという。やがて、Aさんは、被災者のために働くことになるが、その仕事も自分の「使命」と受け止め、その仕事を通して、自分が真に人の役に立っているという実感を強く抱くようになった、と語ったのである。

Aさんの事例を上述のアンケート調査や他のインタビューの語りと重ね合わせると、キャリア転機などで苦悩を経験した中高年者のなかには、次の図のようなプロセスでスピリチュアリティに開かれ、働く意欲が高まる人があるように思われる。

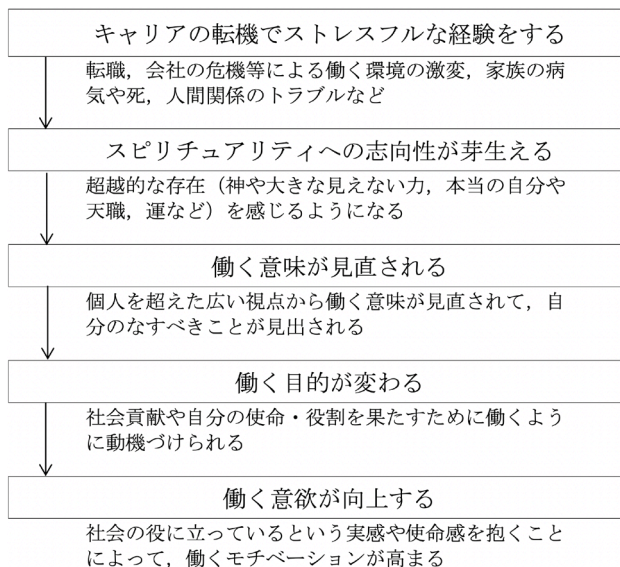


図2 スピリチュアリティへの志向性と働く意欲の向上

もちろん、中高年者のなかには、キャリア転機などに際して強いストレスに苛まれ、精神的不調に陥って働く意欲が低下したままの人もある。あるいは、生活の糧を得るために仕事することに精一杯で、働く意欲が高まらない人も少なくないだろう。しかし、Aさんのように、スピリチュアルな体験をして、逆境を前向きに受け入れられるようになり、やがて、自分のなすべきことを見出し、それを実行するプロセスで、さらに働く意欲が高まっていく人もいる。それは、James, W.(1917/1969)の言う「二度生まれ」の体験に通じるかもしれない。本研究によって、少なくと

もそのようなプロセスを歩む人がいるということは確認できたのではないだろうか。

5. 今後の課題

今回の研究協力者は、日本版GHQ12の結果がすべて臨界点を下回る健常群であるため、今後は、このようなプロセスがより臨床的に深刻な問題を抱えた人において、どの程度起こりうるかを調べるのが課題になるだろう。また、本研究では協力者が8名と限られているため、さらに多くの方々の協力を得てこうした知見の妥当性を検証することが望まれる。

文 献

- Hansen, S. S. (1997). *Integrative Life Planning—Critical Tasks for Career Development and Changing Life Patterns*. San Francisco: Jossey-Bass. 平木典子・今野能志・平和俊・横山哲夫(監訳)乙須敏紀(訳)(2013). *キャリア開発と統合的ライフ・プランニング—不確実な今を生きる6つの重要課題*. 福村出版.
- James, W. (1917). *The Varieties of Religious Experience: A Study in Human Nature*. Longmans, Green, And Co. New York, London, Bombay, Calcutta, and Madras. 梶田啓三郎(訳)(1969). *宗教的経験の諸相* 上・下. 岩波文庫.
- 鹿毛雅治(2013). *学習意欲の論理—動機づけの教育心理学*. 金子書房.
- 中川泰彬・大坊都夫(2013). *日本版GHQ12*. 日本文化科学社.
- 中村雅彦(2007). *スピリチュアリティの心理学的研究の意義*. 安藤治・湯浅泰雄(編). *スピリチュアリティの心理学*. せせらぎ出版.
- 佐藤郁哉(2008). *質的データ分析法 原理・方法・実践*. 新曜社.
- 浦田悠(2013). *人生の意味の心理学 実存的な問を生むところ*. 京都大学出版社.